

# 高専生が意欲を持って取り組める プレゼンテーション授業

柴田美由紀\*1

The way to improve students' motives in presentation classes in College of Technology

Miyuki SHIBATA

This paper considers the way to improve students' motivation in presentation classes in College of Technology. This consideration is written on a basis of my practices, which I carried out in classes of "Japanese" to 3rd graders from 2008 to 2010. In order to know students' opinions and thoughts in presentation class, I analyzed the students' questionnaire. Through the analysis, three effective ways to improve students' motives were found. These are (1) self-expression through that he or she is interested in, (2) good use of PowerPoint, and (3) mutual evaluations between students. If students play active roles in a class, students should be able to improve Communication-Skills steadily and pleasantly.

KEYWORDS : presentation, students' motives, self-expression, mutual evaluations, PowerPoint

## 1. はじめに

本研究は、高専国語におけるコミュニケーションスキルプログラム開発の一環として、稿者が3学年の「国語」担当クラスにおいて行ったプレゼンテーション授業(H20-22年度)の実践と分析から、高専生が意欲を持って取り組めるプレゼンテーション授業のあり方について考察するものである。

H20年度より、3学年「国語」のコミュニケーションスキルプログラムの最後を締めくくる課題を、それまで実施していたスピーチからプレゼンテーションへと変更した。すると、学生たちの姿勢が積極的なものへと変化した。H21年度はツールをパワーポイントに限定してプレゼンテーションを

行ったところ、熱心に準備作業をする学生が増え、また発表者の欠席がほぼ無くなった。さらに、H22年度は一部のクラスで学生同士による相互評価を導入した。その結果、プログラム終了後の学生アンケートにおいて、「コミュニケーション能力が向上した」と回答した学生が、当該クラスでは約9割に達した。

これらの実践について学生アンケートの結果を中心に分析したところ、高専国語のプレゼンテーション授業において高専生の意欲を高めるための要素が3つ明らかになった。すなわち①興味のある物事を通じた自己表現、②PowerPointの有効活用、③学生同士の相互評価の導入である。

高専生の志向性に寄り添った授業を展開することができれば、学生たちの取り組みは意欲的な

\*1 一般科(Dept. of General Education, Oyama National College of Technology), E-mail: miyuki-s@oyama-ct.ac.jp

ものとなるはずである。能動的な取り組みは受動的な取り組みの何倍もの成果を生み出すものである。学生たちの取り組みが意欲的になるほど、コミュニケーションスキルの向上は目覚ましいものとなる。何より、楽しみながら主体的に学ぶことほど人生を豊かにするものはないのである。

## 2. 学生の意欲を高める3つの要素

### 2. 1 興味のある物事を通じた自己表現

H19年度まで、稿者は3学年のコミュニケーションスキルプログラムの最後を締めくくる項目としてスピーチを実施していた。H20年度、プログラムに新たにプレゼンテーションの項目を加えるにあたって、これをプログラムの最終項目に実施することとした。スピーチもプレゼンテーションも、あるテーマについて決められた時間内で単独で発表を行う点では共通していたが、ツールを用いたプレゼンテーションの発表は、情報収集やスライド制作など準備に手間暇がかかるため、スピーチよりもハードルが高いと予想したからである。しかし、意外なことに多くの学生たちはその手間を楽しみながら、スピーチよりも積極的に取り組んでいた。学生アンケートの回答でも「またスピーチ・プレゼンテーションをやってみたいですか?」という問いに対して、「またやってみたい」と答えた学生はスピーチが57%、プレゼン

テーションが69%であった(図1)。

プレゼンテーションの方に積極性がみられた理由の1つとして、彼らにとってプレゼンテーションはスピーチよりも自己表出がしやすい表現形式であることが考えられる。スピーチは、内面的要素を情熱的に表現することを理想とする。すなわち、直接的な自己表出の度合いが大きい発表形式なのである。しかも、ツールなしの素手の発表であるから聴衆の視線は発表者に集中する。発表者の精神的負担は少なくないので、特に内向的でシャイなタイプの学生には苦痛となるだろう。そして、高専にはこのタイプの学生が多いのである。H15年度にスピーチ(テーマは自由とした)を実施した際、1~2割の学生が発表の当日急に欠席をした。「どうしても無理です。」というのがその理由であった。

しかし、こうしたタイプの学生ほど、実は自己表出への欲求を強く内在させているように思われる。直接的に自己の内面を表出することには抵抗感があっても、興味のある物事を通じた間接的な自己表出ならばそれほど抵抗感がないはずである。そして高専生の多くが、自分の興味のある物事に関して並々ならぬ情熱と知識を持っている。ならば、自分が興味関心のある物事について情報収集し発表を行うプレゼンテーションこそ、彼らが自己表出を試みるのに最適な表現形態といえるのではないか。

授業では「20\*\*年、私の提案」というテーマを設定した。「自作パソコンのすすめ」「えんぴついろいろ」「日常にスパイスを一手相占い」など各人各様の発表が並んだ。感想欄には「一から自分でテーマを決めて準備をして人前で話すプレゼンは楽しみながら準備できて良かった。」(H21 3A)「自分で構成を組み立てることはおもしろかった。ネタのプレゼンをしやすい雰囲気を『いいな』と感じた。」(H20 3D)などあり、発表を作り上げる過程を楽しむ学生たちの姿がうかがえた。実習好きの学生たちにとっては、これも1つの「ものづくり」なのかもしれない。

H22年度の学生アンケートでは、「プレゼンをしてみて充実感があった。」と回答した学生は78%だった。彼らに具体的に何が良かったかを選択形式で問うたところ、「クラスメイトに自分の話を聞いてもらうのはなかなかいい気分だった。」を選んだ学生は21%であった。感想欄には次のようにあった。「自分の好きなことを話すことで自分を

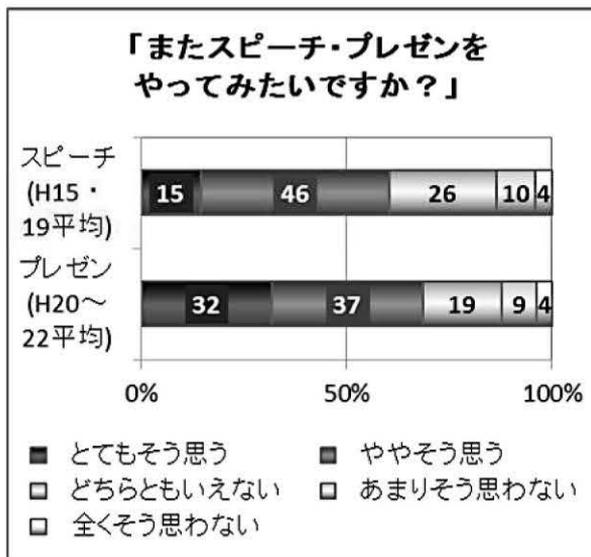


図1

多くの人に知ってもらいたい良い機会になった。次はもっと良いものを作れると思った。」(H20 3A) 『2010年私の提案』という題がとても良かったと思います。色々考えることもできるし、自分を発表することができると思うからです。」(H21 3A) さらに、「詳しくは説明できないが、自分の中の何かが成長したと思う。」(H20 3E) というコメントもあった。自分を表現する経験が人間形成に強い影響力を持ちうることを改めて教えられた印象深いコメントであった。

## 2.2 パソコンの有効活用

H20年度はツールを自由選択とした。実物を持参したり、模造紙を用いたりと様々な工夫がみられた点は良かったが、ツールを用意してこない学生も2割程いた。手抜きで用意しなかったケースもあったが、何をどうしたらよいのかお手上げになってしまったケースの方が多いように見受けられた。一方、パソコンを使った学生は2割程度であったが、PowerPointなどのプレゼンテーションソフトを用いての発表にはインパクトがあった。それに比べると、他のツールを使った発表は折角の努力の割に見劣りがしてしまうのが気になった。「プレゼントといえばパワポ」という世間の認識も、なるほどと思わざるを得なかった。

そこで、H21年度からは思い切ってツールをパソコンに限定した。スライドの作成は各自の宿題とし、放課後などの空き時間を利用して、情報センターや図書館のパソコンでPowerPointを用いて作成するように指示した。しかし、PowerPointを使ったことがない学生が案外多いことを把握していなかったために、「PowerPointがよくわからなくて大変だった」(H21 3D)という状況が多々生じてしまった。また、自宅のパソコンで作業したがPowerPointを持っていない学生<sup>注1)</sup>には、OpenOfficeなどのフリーソフトの使用も可とした。しかし、発表用に用意したパソコンでファイルが開かなかったり、動作が上手くいかなかったりと、発表以前のトラブルに忙殺された。さらに、発表の現場では、稿者の技術不足による不手際から、機材の接続に戸惑ったり、動画再生が途中で停止して慌てたりと、冷や汗の連続であった。

このように多くのトラブルに見舞われたものの、ツールをパソコンに限定したことは3つの利点をもたらした。

まず、積極的に準備に取り組む学生が増えたということである。ツールの準備をしてこないケースはほぼなくなった。H20年度とH22年度を比較すると、準備時間の違いは歴然としている(図2)。H22年度は60%の学生が、2時間以上を費やして準備作業に取り組んでいる。「PowerPointを作るのは楽しかった。」(H21 3A)という素直な感想もあった。スライド作成の作業は手間暇がかかるので敬遠されるのではないかと案じていたが、その心配は無用であった。収集した情報をスライドにまとめ上げる作業には、デザインの要素やパソコン操作の面白味があるからであろうか。

準備が充実してくると、準備時間の確保が次の問題となってくる。スライド作成は宿題としたのだが、「せめて2時間でもいいから準備時間を取ってほしかったです。(6時間ぐらいかかったのぞ)」(H22 3C)という具体的な意見も複数あった。また、「全体的にスケジュールが窮屈で、発表などの準備調査などの時間が取り取られていないと感じた。そのため、自分の理想よりもやや低めの結果しか出せなかったようにも感じる。」(H21 3D)という意見には、プログラム全体の時間配分を見直す必要性を感じた。今後の課題としたい。

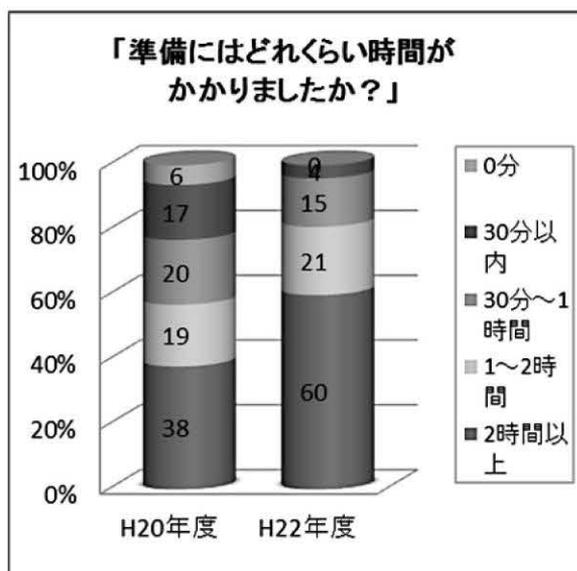


図2

第2の利点は、緊張感の緩和である。発表の際聞き手の視線は主にスクリーンに向けられるため、発表者は聞き手の視線に長時間さらされずにすむ。加えて、室内はスクリーンの映像が見えやすいように薄暗くなっている。発表者の姿はあからさま

にならずにすむのである。さらにいえば、普段パソコン生活を送っているタイプの学生の場合、パソコンに触れているだけで落ち着くということがあるようだ。愛用のパソコンを持ち込んで手際よく操作し、水を得た魚のように生き生きと発表する学生もいた。

3 つめとして、パソコンをツールに用いた発表経験の場を提供できたということである。「機材を使用してプレゼンする機会があまりないので、このようなかたちでプレゼンの練習ができるということはとてもためになった。」(H21 3A) という感想もあった。3 年生の多くは、間近には卒研発表、将来的には会議や学会などでのプレゼンテーションに対して、期待と同時に漠然とした不安もいただいているはずである。なるべく早い時期から、なるべく本番に近い環境で、場数を多く踏み、成功体験を積んでおくことは将来への大きな糧となる。この授業での経験はささやかなものではあるが、その一助となることを願っている。

### 2. 3 学生同志の相互評価の導入

発表者にとっては聞き手あつてのプレゼンテーションである。稿者は授業に先だって、相原博之氏の解説<sup>1)</sup>を引用しながら「プレゼンテーションの目的は聞き手とともに頂上に登ること（プレゼンテーションで言いたかった一つのことを伝えること）」であると説明することになっている。聞き手の反応は、発表の達成度をみる大切なバロメーターなのである。学生たちは、大喝采に包まれるような場合を除いて、ほとんどが期待と不安の入り交じった面持ちで発表を終え壇上から降りてくる。聞き手が自分と一緒に山に登ってくれたのか、確認しフィードバックする必要がある。

そこで、H22 年度は一部のクラスにおいて学生同志の相互評価を導入し、聞き手からのコメント集<sup>2)</sup>を配ってみた。コメント集にはクラスメイト全員からのコメント（発表の良かったところや改善点など）が記されており、発表の具体的な手応えを感じることができると大変好評であった。「コミュニケーションスキルは向上したと感じますか？」の問いに「そう思う」と回答した学生は、コメント集を配布できなかった 3D では 75% なのに対して、配布した 3A では 87% と、ほぼ 9 割に達した（図 3）。学生同志の相互評価の導入には十分な効果があったといえる。

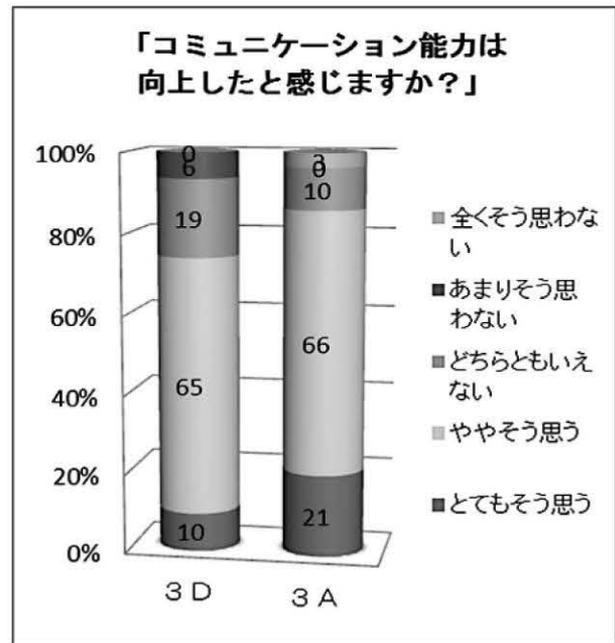


図 3

感想のなかには、「話し下手だったが、皆の感想が良いことを書いてくれて自信にもなったし、単純に嬉しかったのもある。これを機に建築のプレゼンも自信をもってできそうだ。」(H22 3A) と喜びと希望に溢れた感想もあった。聞き手の持つ影響力の大きさを改めて感じさせられたコメントであった。

聞き手にとっても、発表への関心は並々ならぬものがあるようだ。「クラスメイトのプレゼンを聞いて面白かったですか？」の問いに、H22 年度は 96% の学生が「面白かった」と答えている。（図 4）

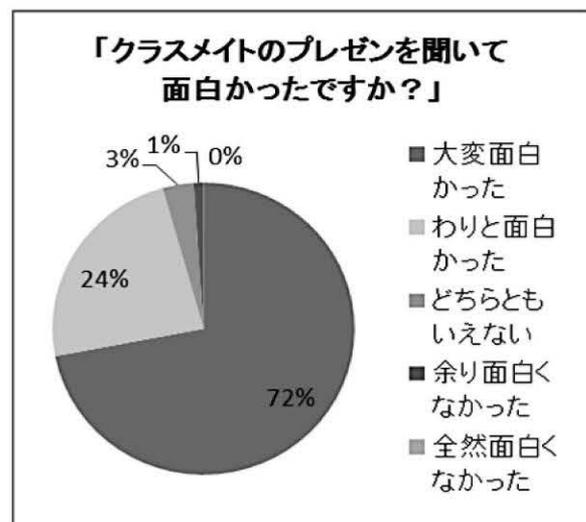


図 4

なかでも「大変面白かった」と答えた学生は72%に上った。発表が「面白かった」と答えた学生に「具体的に何が良かったですか？」(図5)と問うた。「みんな意外とやるものだと感じたこと」が27%、「クラスメイトの新たな一面を知ったこと」が27%であった。合計すると半数以上の学生がクラスメイトに嬉しい驚きを持ったことがわかる。感想には「みんな発表がすごかったし、クラスの人のお話を聞く授業というのも楽しかったです。」(H22 3C) 「何よりクラスメイトの意外な一面を知ることができたのが大きかった。」(H21 3A)といった記述が多くみられた。また、24%が「新しい知識や情報を得ることができたこと」と答えているのも見逃せない。同年齢同士で興味の方角性も似ているため、お互いが持ち寄る題材に知的好奇心を刺激されるのであろう。

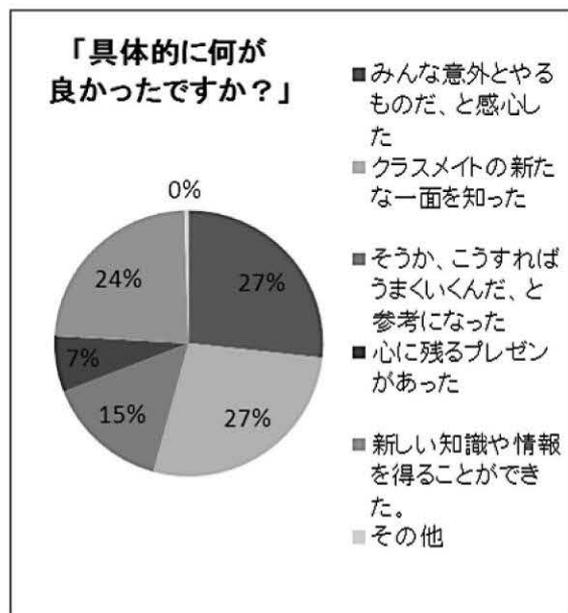


図5

授業では「発表を創り上げるのは発表者だけではない。発表者は半分、あとの半分は聞き手が担うもの。」という共通認識を持つようにしている。発表者にとって、熱心な聞き手は最良の味方である。そして学生たちは聞き手としてのあるべき態度を、発表者の立場で切実な経験を通じて学んでいくのである。「相手の気持ちに立ち、相手に伝わるように話す、そして相手の立場に立って聞くことの大切さを学んだ。」(H22 3C) 『「聞く」ことも話すことと同じくらい重要だということがこの授業を通して分かりました!』(H21 3A) こうした

聞き手の意識を高めるためにも、学生同士の相互評価は有効であったと考える。

### 3. おわりに

授業でプレゼンテーションをしようと持ちかけると、学生たちの表情は緊張と困惑でこぼれてしまう。しかし、授業が進むにつれ、学生たちの表情はほぐれ、活気づいてくるように感じる。

H22年度のアンケートでは、「プレゼン授業全体の印象について、面白かったですか？」という問いに、94%が「面白かった」と回答した(図6)。自分にも出来るということや、その楽しさは、実際に経験してみても初めて理解できるものである。94%という数字は、まさに体験の持つ力の大きさによるものである。

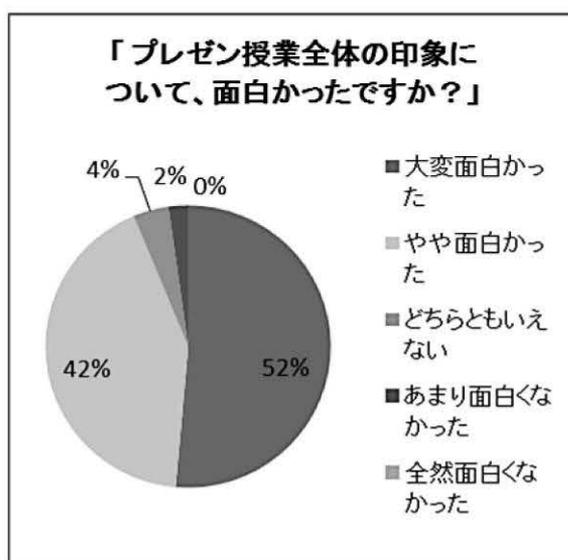


図6

実際に体験してみることによって、今まで知らずにいた自分の能力や、プレゼンテーションの楽しさに気付いた例を、次の感想にみることが出来る。「人前で話すのが苦手なので『どうなる事か…』と思ったけど、やってみたら意外とできました。」(H22 3C) 「発表する前は嫌だなあと思っていたが、発表が終わると達成感がありとてもよかったと思う。」(H22 3C) 「プレゼンは思ったよりもおもしろかった。もっと緊張して話せないと思っていたけれど、意外と話することができて楽しめた。」(H20 3C)

「またプレゼンテーションをやってみたくて

すか？」という問いには、76%が「またやってみよう」と回答した(H22)。実際にやってみて、「自分にも出来た」(自信)、「やった甲斐があった」(意義)と感じれば、次への意欲は自然と高まっていく。次の一歩を自発的に踏み出せるようになれば、コミュニケーションスキルの向上は目覚ましいものとなる。

最後に今後の展望について触れたい。図7は、「コミュニケーション能力は向上したと感ずますか？」という問いに対する回答を、H20～22年度で比較したものである。「とてもそう思う」と「ややそう思う」と回答した学生、すなわちスキルアップの手応えを得ている学生は、H20年度からH22年度にかけて69%→72%→77%と着実に増加している。その一方で、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した学生も、6%→3%→9%と増加していることは、看過できない事実である。流れに乗って盛り上がっている学生に対する反発からか、基本的なスキル不足が原因でついて行けなくなってしまったせいなのか、稿者の目配りが不十分だったのか、あるいは他に原因があるのか、理由を慎重に見きわめながら、きめ細かいフォローをしていく必要があると考える。

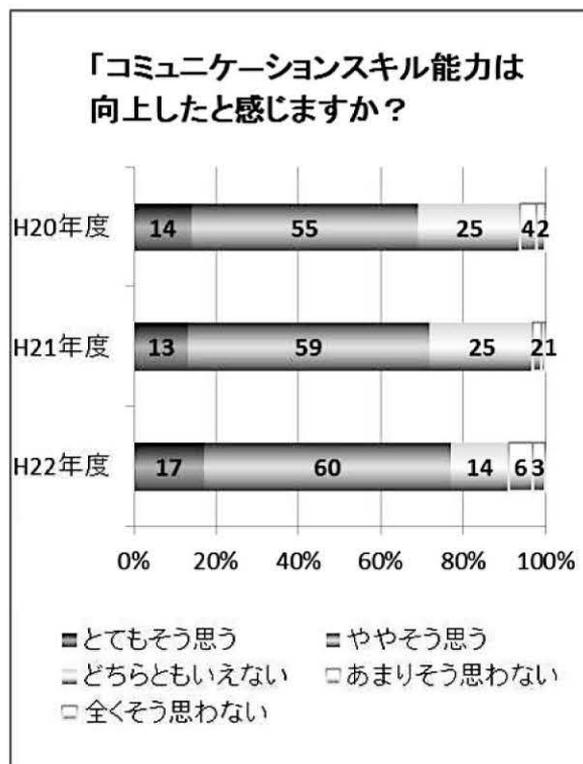


図7

また、今後は、学生同志の相互評価に加えて、学生自身による自己評価も導入していきたいと考えている。自己評価については、プレゼンテーションの授業においてばかりではなく、コミュニケーションスキルプログラム全体において総合的に検討し、自己評価システムとして構築していきたい。学生が自分自身の変化を確認できるような仕組みがあれば、ここまで進歩してみたいという目標が立てやすいため、意欲の喚起につながることで期待できるからである。

#### □参考文献

1) 相原博之：プレゼンテーション入門，pp181-193，パル出版(2002)

#### □注記

注1) H23年度にはマイクロソフト社と高専機構との包括ライセンス契約が行われたため、PowerPointは高専生にとって身近なものとなった。

注2) 聞き手からのコメント集とは、聞き手によるコメントシートを発表者別に短冊状に切り分け、発表者ごとに束ねて綴じたもの。奈良高専の鍵本有理准教授のアイデアを参考に作成した。

#### □付記

本稿は平成23年度豊橋技術科学大学高専連携教育プロジェクト「日本語コミュニケーション能力育成プロジェクト」における研究成果の一部である。

【受理年月日 2011年9月30日】